

ジュニア選手育成に関する実践研究

— バドミントン競技のジュニア選手を対象として —

Study on Training Program for Junior Player

— Regarding to Junior Badminton Competitors —

北 村 優 明 小 島 一 夫

KITAMURA, Masaaki

KOJIMA, Kazuo

1. はじめに

スポーツ振興法（昭和36年6月16日現文部科学省発布）の規定に基づきスポーツ振興計画が平成12年9月に文部大臣告示として策定された。（平成13年度（2001年）～22年度（2010年）の10年計画）計画策定から5年が経過したことに伴い、中央教育審議会スポーツ・青少年分科会の意見を踏まえ、平成18年9月に計画を改定した。その計画概要には（1）スポーツの振興を通じた子どもの体力の向上方策。（2）地域におけるスポーツ環境の整備充実方策。（3）我が国の国際競技力の総合的な向上方策。の3つの柱がある。（2）のAとして総合型地域スポーツクラブの全国展開を目指し、2010年までに、全国の各市町村において少なくともひとつは総合型地域スポーツクラブを育成する（将来的には中学校区の程度の地域に定着）という目標がある。現時点で実現しているのは兵庫県と富山県のわずか2県である。また、（3）のAの中にジュニア期からトップレベルに至るまで一貫した理念に基づき最適の指導を行う一貫指導システムの構築も挙げている。上記の計画概要をも踏まえて、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターが設立された。その中にバドミントン競技も組み入れられた。

バドミントン競技も近年、他の競技のようにジュニアの育成に目覚ましい普及の実際がある。バドミントンのジュニア育成に関しては、スポーツ少年団等の社会体育からの発展を遂げているのが殆どで、その先駆的な県として1970年代から圧倒的な強さを誇った熊本県が挙げられる。その強さは1980年代の後半まで続いた。オリンピック選手に熊本県出身者が多いのも頷ける。その後、大阪、滋賀、茨城、香川、青森、宮城の各地区が力をつけてきて、全国的にレベルアップが図られた。1990年代には以前は弱小といわれた地区から全国大会の優勝者が出てくるようになり、全国的な広がりを見せている。

小学生については、2000年に日本バドミントン協会の登録が始まり、2007年現在で24,049名の登録者がいる。また、日本小学生連盟では独自の登録制度（団体登録を含む）を2007年から施行し、2007年は23,474名でクラブ登録数は1,463となっている。

中学生については、2007年は男子35,342名、女子86,909名で合計122,251名、団体登録では男子2,303、女子3,476で合計5,779校となっている。

そんな中、北海道のジュニアは必ずしも全国レベルにあるとは言えない。単発的に全国大会の上位者は出るが永続性に欠けるのが現状である。

本研究は継続的な全国レベルのジュニア選手育成のために平成17年に設立した札幌ジュニアバドミントンクラブの選手強化・育成を運営・技術指導・メンタルサポートを通して総合的に実践した研究（アクション・リサーチ）である。

尚、本研究は、平成16年度～20年度文部科学省・私立大学学術研究高度推進事業（「学術フロンティア推進事業」）北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターにおける競技者育成分野の研究の一貫として行われた。

2. 研究方法

以下の項目の調査を行い、4年（実質3年間）にわたる実践経過及び結果の考察をする。

（1）クラブの運営方針及び目標

- ① クラブ設立目的
- ② クラブ運営方針

（以下の項目について、コーチへの半構造化面接を実施：6回 計7.5時間）

- ・指導理念と指導方針について
- ・指導方法（選手に対する配慮等）
- ・父母に対しての取り組みについて

（2）クラブの構成（年齢、性別、身体、体重）

（3）練習の実施計画及び試合結果

（4）練習及び試合の観察

（5）選手へのアンケート調査（内容分析）

3. 調査及び実践結果（経過）

1. クラブの運営方針及び目標

（1）クラブ設立目的

- ・ 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターの競技者育成分野におけるバドミントン競技の実践研究の中から、ジュニアの指導法の確立を図る。
- ・ 日本バドミントン協会の指針である小・中・高一貫指導の北方圏での実践を通して心・技・体の調和のとれた選手の育成を図る。

上記の設立目的に即して下記の要項を作成し関係各位に配布した。

札幌ジュニアバドミントンクラブ 要項

1. 発足にあたって

バドミントン競技において、最も重要な時期である中学・高校生を中心として基本的な

体力や技術の向上を目指したクラブチームを作り、中学・高校とそれぞれのステージでの活躍を目標とします。

単に技術的な指導に終始することなく、基本的な一般常識を含めた人間形成の創造と、団体行動をとることの意義、重要性を認識し、互いに助け合い、励ましあうことのできる「協調性」を大切にできるクラブにしたいと考えています。

2. クラブ指導者代表	角谷淳一（写真略）
3. 指導スタッフ	村井秀樹
4. 練習日	月・水・金（変更することもあります）
5. 練習場	北翔大学 北方圏生涯スポーツ研究センター体育館
6. 練習時間	19：30～22：00

この呼びかけに、小学生を含め28名の児童・生徒があつまり、平成17年度よりクラブを発足させることができた。

（2）クラブ運営方針（以下の項目について、コーチへの半構造化面接を実施）

① 指導理念と指導方針について

- ・子どもたちの持っている良いところを伸ばしてあげたい。
- ・バドミントンを好きになってもらいたい。
- ・与えられた課題が出来たときに褒めることにより、生徒の達成感と自己の満足を与えたい。

② 指導方法Ⅰ（心理面：選手に対する配慮等）

- ・20名ぐらいの参加者がいるが、1日一回以上の会話を持つようにしている。
- ・なるべく多くの子どもたちとシャトルを打つことにより、コミュニケーションをとっている。
- ・相手から目をそむけることなく、相手がどういう意図を持ちプレーしているかをも極めることを強調している。
- ・こうすればもっと良くなると励ましながらやる気を出させ、何が足りなくて負けたかを気づかせる方法をとっている。

③ 指導方法Ⅱ（技術、体力面）

- ・トレーニングの50%を中長距離走によるインターバル走を多くとり入れている。心拍数を高めて回復力の強化をはかる。
- ・約半分は小中学生なので、負荷を多くかけずに脚部の強化練習（走ること、跳ぶこと）を工夫している。
- ・ストロークにおいては、細かい技術は教えず、基本ストローク（クリアー、スマッシュ、ドロップ及びそのレシーブ）に対し、ミスをせず長いラリーができる忍耐力、持久

力を高めることを心がけている。

- ・チャンスには確実にフィニッシュにもっていける力強さをつけるためのパターン練習を繰り返し行っている。

④ 反省と課題

この3年間で感じたことは、こちらの意図するところを理解するには、入会してから3か月から半年かかる。そして、児童・生徒が自主的に練習に参加でき、実績が出始めるのが2年目以降になる。もっと早いうちに意識改革ができないものかが今後の課題である。

③父母に対する取り組みについて

クラブ発足当初、妻に協力してもらい、一緒にノックを中心にシャトルワーク等の練習をしていたこと、また自分の子供もクラブの一員として参加していることも保護者の理解と協力を得られた理由だと角谷コーチは確信している。クラブ員の中には十勝支庁から週末、祭日、長期休日を利用して泊まり込みながら練習に参加する者もいた。また、本研究所施設が札幌市内から離れていることにもかかわらず練習に参加し続けられたということは、保護者とクラブ員一人一人のモチベーションが高かったのではと角谷コーチは付け加えた。そして、上述したような理由からか、クラブ発足以来、保護者とのトラブルはいっさいなかったと角谷コーチは言っている。

2. クラブの構成

以下は各年度別の4月当初のクラブ員の構成数である。(途中入会、退会は含まれない)

	男子	女子	計
平成17年度	16名	12名	28名
平成18年度	14名	8名	22名
平成19年度	14名	14名	28名
平成20年度	16名	14名	30名

3. 練習の実施計画及び試合結果

練習の記録は以下のような形式で、中・短期的な目標のもとに実施されたものを作成した。

研 究 記 録

1	研究名 (被験授業名)	ジュニアバドミントン指導法の確立について
2	使用年月日	H17. 4. 1 (金) (19:30~21:45)
3	使用施設名	北方圏生涯スポーツ研究センター スポルホール

4	使用担当者	北村優明
5	使用人数	19人 (男子11人・女子8人)
5	研究内容・概要・成果等	<p>平成17年度 第5回 札幌地区中学生バドミントン春季大会 (団体戦／個人ブロック予選4月23(土)～24日(日)) (団体戦／5月1日(日)・個人戦本選5月7日(土)) に向けての競技力向上練習。</p> <p>・フットワーク ・基本打ち ・2対1 (クリアーだけを交互に打ち分ける) (クリアーorドロップ交互) (フリー) ・ゲーム練習</p>

上記記録(平成17年4月～平成20年3月まで)を以下のように集計した。

(1) 平成17年度(練習日数と時間 117日、324,75時間)

月	目標大会	練習日数	練習時間	練習内容	結果
4	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	12	27	・ゲーム練習	男子S 3位、女子S 2位 女子D 2位・3位
5	・全日本ジュニ	10	22.5	・基本打ち	男子S 3位、女子S 2位
6	ア札幌予選大会	13	29.25	・2対1	新人の部男子S優勝・3位
7		12	27	・ゲーム練習	新人の部女子S 3位
8	・全日本ジュニ ア北海道予選 大会	9	20.25	・基本打ち ・2対1 ・ゲーム練習	男子S 2位 女子S 2位
9	・全日本ジュニ	10	30	・基本打ち	男子S優勝・3位、
10	ア(全国大会) ・中学新人大会 札幌地区予選	8	18	・フットワーク ・2対1 ・ゲーム練習	女子S優勝・3位 男子D 優勝 女子D 2位
11	・中学新人バド ミントン競技選	10	22.5	・基本打ち ・フットワーク	男子S 3位 女子S 5位
12	手権大会全道大	11	28.25	・2対1	女子D 5位
1	会	11	28.25	・ゲーム練習	

2	・アサヒスポーツ杯学年別大会 (札幌市)	10	22.25	・基本打ち ・フットワーク ・2対1 ・ゲーム練習	2年男子S 2位 1年男子S 優勝・2位・3位 2年女子S 優勝・3位 1年女子S 3位
3	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	11	24.75	・基本打ち ・ゲーム練習	

(2) 平成18年度 (練習日数と時間 125日、324,5時間)

月	目標大会	練習日数	練習時間	練習内容	結果
4	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	10	25	・基本打ち ・フットワーク ・2対1 ・ゲーム練習	男子S 優勝・3位、 女子S 優勝・3位 男子D 優勝 女子D 優勝・3位
5	・全日本ジュニア札幌予選大会	11	27.5	・基本打ち ・フットワーク	男子S 優勝、女子S 2位 女子ダブルス 優勝・2位
6		12	30	・2対1 ・ゲーム練習	新人の部男子S 優勝・2位・3位
7	・中体連全道大会	10	25		新人の部女子S 3位*男子S 3位 (全道大会)
8	・全日本ジュニア 南北海道予選大会	8	20	・基本打ち ・2対1 ・ゲーム練習	男子S 優勝・3位・3位
9	・全日本ジュニア (全国大会)	11	27.5	・基本打ち ・ゲーム練習	男子S 優勝・2位・3位 女子S 3位
10	・中学新人大会 札幌地区予選	9	22.5	・基本打ち ・ゲーム練習	男子ダブルス 3位 女子D 2位
11	中学新人バドミ	10	25	・ゲーム練習	男子S 3位
12	ントン競技選手	11	32	・ゲーム練習	
1	権大会全道大会	5	17.5	・ゲーム練習	
2	アサヒスポーツ杯学年別大会 (札幌市)	13	36.5	・基本打ち ・フットワーク ・2対1 ・ゲーム練習	2年男子S 優勝・2位 1年男子S 2位 2年女子S 3位 1年女子S 2位

3	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	15	36.5	・ゲーム練習	
---	--------------------	----	------	--------	--

(3) 平成19年度 (練習日数と時間 134日、345,5時間)

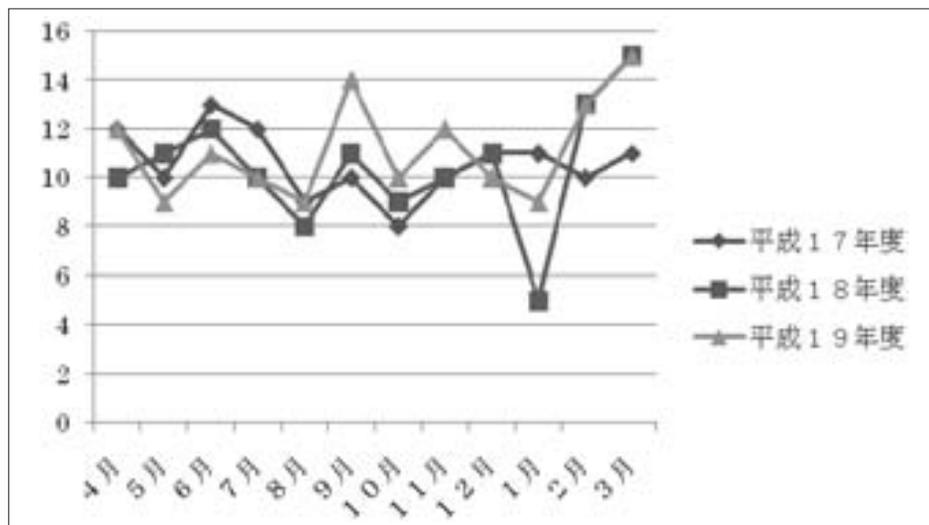
月	目標大会	練習日数	練習時間	練習内容	結果
4	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	12	30	・基本打ち ・ゲーム練習	男子S優勝・2位・3位、 女子S優勝・3位 女子D 3位
5	・全日本ジュニア札幌予選大会	9	22.5	・基本打ち ・フットワーク	男子S 2位 女子S 3位
6		11	27.5	・2対1	男子D 優勝
7		10	25	・ゲーム練習	女子D 3位
8	・全日本ジュニア北海道予選大会	9	22.5	・基本打ち ・ゲーム練習	男子D 3位
9	・全日本ジュニア(全国大会)	14	35	・基本打ち ・フットワーク	男子S優勝・3位 女子S優勝
10	・中学新人大会 札幌地区予選	10	28	・2対1 ・ゲーム練習	女子ダブルス3位 新人の部男子S 2位・3位 新人の部女子S優勝
11	中学新人バドミントン競技選手権大会全道大会	12	31.5	・基本打ち	男子S 3位
12		10	28	・フットワーク	女子S 2位
1		9	22.5	・2対1 ・ゲーム練習	
2	アサヒスポーツ杯学年別大会(札幌市)	13	36.5	・基本打ち ・フットワーク ・2対1 ・ゲーム練習	2年男子S 2位 1年男子S優勝・2位 2年女子S優勝 1年女子S優勝 3位
3	・札幌地区春季 (スガワラ杯)	15	36.5	・ゲーム練習	

(4) 練習日数について

① 3年間の練習日数をまとめると以下の表のようになる。(表-1)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成17年度	12	10	13	12	9	10	8	10	11	11	10	11
平成18年度	10	11	12	10	8	11	9	10	11	5	13	15
平成19年度	12	9	11	10	9	14	10	12	10	9	13	15

② 上記表をグラフにすると以下の図のようになる。(図-1)



(注) 毎年8月と1月に練習日数が減っているのは大会が多めにあるのと、盆暮れの休みがあるからである。

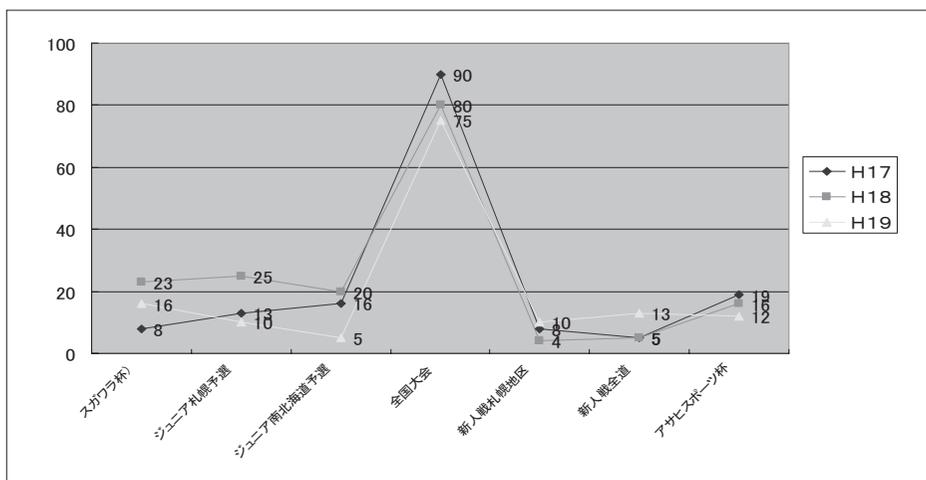
(5) 試合結果について

① おもな試合結果を表にすると以下のようになる。(表-2)

	札幌地区春季 (スガワラ杯)	全日本ジュニア 札幌予選大会	中体連全道大会	全日本ジュニア 南北海道予選大会
H17	8	13	0	16
H18	23	25	6	20
H19	16	10	0	5
	全日本ジュニア (全国大会)	中学新人大会札幌 地区予選	中学新人バドミントン 競技選手権大会全道大会	アサヒスポーツ杯学年 別大会(札幌市)
H17	90	8	5	19
H18	80	4	5	15

H19	75	10	13	12
-----	----	----	----	----

② 3年間の試合結果を以下のようなポイント換算をしてグラフ化した。(図-2)



ポイントに変更有

全国大会	1位 30点	2位 20点	3位 15点	ベスト8 10点
全道大会	1位 10点	2位 8点	3位 5点	
市内大会	1位 5点	2位 3点	3位 1点	

4. 練習及び試合の観察



ジュニア選手の大会での試合風景



ジュニア選手の保護者



指導者とジュニア選手の指導風景

5. 選手へのアンケート調査

- ・ 実施日：2008年3月22日
- ・ 実施数：17名（男子7名、女子10名）

氏名	性別	年齢	身長 (cm)	体重 (kg)	競技開始年齢
A	女	10	138	30	8
B	女	11	160	40	7
C	女	11	142	33	7
D	女	13	159	45	10
E	女	14	159	45	10
F	女	14	154	47	9
G	女	14	162	51	10
H	女	14	159	48	10
I	女	14	164	51	9
J	女	15	163	53	10
K	男	12	163	50	9
L	男	13	164	50	7
M	男	13	158	46	10
N	男	14	163	50	11
O	男	14	152	40	10
P	男	14	170	55	13
Q	男	18	170	63	11

① 競技開始年齢 (平均):男子10.1歳、女子9歳 (平均 9.5歳)

② バドミントンを始めたきっかけは？

・ 兄姉がしていたから

- ・親がしていたから 3
 - ・友達がしていたから 3
 - ・教室（クラブ）の呼びかけ 1
 - ・コーチの誘い 1
 - ・スポーツがしたかった 1
 - ・無回答 1
- ③ バドミントンが好きですか？（5段階）
- ・大好き 12
 - ・好き 4
 - ・普通 1
- ④ バドミントンをしていて良かったことは？（複数回答）
- ・友達ができた 8
 - ・勝利の喜び 7
 - ・集中力がついた 2
 - ・足が速くなった 1
 - ・反射神経が良くなった 1
- ⑤ バドミントンをしていて嫌だったことは？（複数回答）
- ・親に叱られる 6
 - ・負けが続いたとき 5
 - ・ケガ 3
 - ・トレーニングがきつかった 3
 - ・友達と遊べなかったこと 1
- ⑦ クラブ活動でためになったことは？（複数回答）
- ・体力がついた 5
 - ・我慢強くなった 3
 - ・集中力がついた 1
 - ・筋力がついた 1
 - ・全力で応援できるようになった 1
 - ・大学生や大人の人たちとの練習 1
 - ・団体行動がとれるようになった 1
 - ・競争し合うことの楽しさを学べたこと 1
 - ・向上心が出てきたこと 1
 - ・礼儀・あいさつが良くなった 1
 - ・友達や先輩との接し方をおぼえた 1
- ⑧ コーチの指導でためになったことは？（複数回答）

- ・技術が上がった 8
- ・体力がついた 7
- ・メンタル面が強くなった 3
- ・筋力がついた 1
- ・自信がついた 1
- ・欠点がわかった 1
- ・つらい練習もついていけた 1
- ⑨ コーチへの要望は？（複数回答）
 - ・今まで通りでいてほしい 5
 - ・ランニングがきつい 3
 - ・コーチの機嫌で練習をきつくしないで 3
 - ・トレーニングを減らしてほしい 2
 - ・アドバイスを増やしてほしい 1
 - ・試合（ゲーム練習）を多くしてほしい 1
 - ・ハッキリ話してほしい 1
 - ・練習内容を濃くしてほしい 1
- ⑩ 将来の夢は？
 - ・全国大会に出る 3
 - ・全道大会に出る 3
 - ・オリンピックに出る 2
 - ・バドミントンの選手になる 2
 - ・国際大会に出る 1
 - ・今まで勝てなかった人に勝つ 1
 - ・高校で勝ちたい 1
 - ・諦めないで頑張る 1
 - ・健康でスポーツを続ける 1
 - ・教師になりたい 2

(1) 上記アンケート調査から年齢・身長・体重についての相関を回帰分析すると以下のよう
な結果になった。

① 年齢・身長・体重の重回帰分析

モデル集計

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の 標準誤差
1	.964(a)	.929	.920	.461

a 予測値：(定数)、体重、身長。

分散分析^b

モデル	平方根	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1 回帰	44.383	2	22.191	104.230	0.000 ^a
残差	3.407	16	.213		
全体	47.789	18			

a 予測値：(定数)、体重、身長。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意差確立
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	13.436	3.252		4.133	.001
身長	-0.88	.029	-.437	-3.010	.008
体重	.034	.034	1.371	8.721	.000

a. 従属変数：年齢

② 身長と体重の回帰分析

モデル集計

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の 標準誤差
1	.905(a)	.820	.809	3.826

a 予測値：(定数)、体重。

分散分析^b

モデル	平方根	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1 回帰	1,131.551	1	1,131.551	77.295	0.000 ^a
残差	248.870	17	14.639		
全体	1,380.421	18			

a 予測値：(定数)、体重。 b 従属変数：身長

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意差確立
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	108.914	5.386		20.222	.000
体重	1.006	.121	.905	8.792	.000

a. 従属変数：身長

4. 考察

1. 練習の実施日数（練習時間）と試合結果について

（1）練習日数と試合（大会）結果から

練習の日数の3年間の推移は僅かではあるが増えている。しかし、練習時間の総合計にさほどの変化はない。一方、3年間試合結果の推移は僅かではあるが右肩上がりの進歩がある。このことから、練習日数と試合の結果の相関を求めることはできない。というのは、試合は相手あってのことで、他のクラブチームの活動内容及び状況を調査してはいないからである。ここではむしろ練習日数が多くなったことは、コーチの指導意欲の高揚があり、保護者とクラブ員が活動方針をよく理解するようになってきた結果という見方ができよう。また総練習時間に大きな差異がみられないことについては、練習内容をクラブ員がよく理解するようになり、精選された質の高い内容に移行してきたといえる。よって年々試合結果の向上がみられると推察する。

（2）年齢と身長および体重の推移から

今回の資料は、19年度活動のクラブ員についてのものではあるが、重回帰分析においてもかなりの有意性はみられたが、身長と体重の重回帰分析において顕著な優位性がみられた。このことから、基礎トレーニングを中心にハードな練習が行われていることが推察される。年齢と身長の相関が若干低かったことについては、成長期にあるクラブ員の個人差によると考えられる。

上述したことは17、18年度の資料がない分、縦断的にも横断的にもこのことから活動の成果について妥当性のある考察することはできないまでも、ひとつの目安には成り得ると筆者らは判断する。また、精査のためには性別に関しても区別すべきであったが、今回はあえてしなかった。

2. 技術、体力面の指導について

（1）コーチの指導から

技術指導においては、性差と個人差に留意しての習熟度別の練習メニューを組み、スピードと攻めのきっかけ作りを丹念に実施している。また、年間を通じてある各大会についてはあえて目標を置かず、基本技術の習得にウエートを置いている。このことについては、角谷コーチの「高校以降のことを考えている。」との言に裏付けされている。また、中学校の大会規定によりクラブでの参加登録ではなく、学校単位の登録なため、コーチとしてベンチワークができる大会が限られているという現状もその背景にあると推測できる。

このことを裏付ける資料として、日本中学校体育連盟バドミントン競技における外部指導者数は2007年度で全国では1,128名、北海道では71名（男58、女13）となっている。前掲した全国の登録校は北海道での登録校は5,779校、で北海道では656校（男子301、女子355校）と登録校の割には外部指導者の数が少なく、上記のような制限がなされるのも理解できる。

練習時間と技術の習熟度及び体力面については、週3回（一回につき2時間半）程度の練

習時間の割には基本ストローク及びフットワークの習熟度は高い。このことは、基本を重視したパターン練習の成果が出ているといえる。また、体力面についても角谷コーチの指導理念であるランニングを多く取り入れた練習形態に裏付けられているといえる。いずれにしても、限られた練習時間の中から創意工夫をし、効率的に行われてきたといえる。

(2) 選手の感想（平成20年3月21日に実施したアンケートから）

「コーチの指導でためになったこと」という質問に対する回答の中で、①技術が上がった。②体力がついたと答えた選手が全体の68%という高い数値が得られたことは、選手たち自身も練習の成果を体感しているといえる。

一方、質問⑤バドミントンをしていて嫌だったことは？（複数回答）の回答で、トレーニングがきつかった（3名）また質問⑨コーチへの要望は？（複数回答）ランニングがきつい（3名）トレーニングがきつい（2名）といった回答もあった。これらのことから、体力的に自信のないクラブ員にとってはかなり厳しく思われる練習をしている事が伺われる。しかし、質問③バドミントンが好きですか？（5段階）での回答は全員が普通以上で競技としてのバドミントンに対して意欲的であることがみてとれる。さらに、質問⑩将来の夢は？においては回答の実に76,5%のクラブ員がオリンピックを含めた上位大会で勝つことを望んでいる。つまり、厳しい練習ではあるが目的達成のために必要なことであるとクラブ員のほとんどが認識しているといえる。

また、このことは「クラブ発足以来保護者とのトラブルはいっさいなかった。」と角谷コーチが言っていることにも裏付けられているといえる。

3. 心理面

(1) コーチの指導内容から

角谷コーチのメンタル面での指導方針の中で、「1日一回以上の会話を持つようにし、また子どもたちとシャトルを打つことによりコミュニケーションをとるようにしている。」ということは、日々刻々変わるクラブ員の心理的变化を直接観察し、的確な指導をするための状況把握・分析・判断するための方策といえる。実際の練習においても、筆者らはコーチがクラブ員ひとり一人とコミュニケーションをとっている姿を観察することができた。しかし、このような取組に対してクラブ員たちの受け止め方には差異がみられる。アンケートの質問⑨コーチへの要望は？（複数回答）で今まで通りでいてほしい（5名）に対して、コーチの機嫌で練習をきつくしないでほしい（3）、アドバイスを増やしてほしい（1）等の不満もとれる回答があったことは、コーチの意図するところがクラブ員に伝わっていないというメンタル面でのチームマネジメントの難しさがあるといえる。

次に、「相手がどういう意図を持ちプレーしているかをも見極めることを強調している。」このことは、対人競技であるバドミントンにとっては大切な競技スキルの育成に関わってくる。(小島、1997) 相手の心理状態や行動を読むことができればゲーム展開が有利になるばかりか、日常生活においてストレスの回避にもつながるのである。そして、このようなスタイ

ルが習慣化され、確立されれば、適応性のある望ましい社会化が図れるといえる。

また、「こうすればもっと良くなると励ましながらやる気を出させ、何が足りなくて負けたかを気づかせる方法をとっている。」という指導姿勢において、「励ます」ということはクラブ員たちのモチベーションを高め、さらに「きづかせる」ということは内発的動機づけを高めさせる最良の方法の一つと言える。「内発的動機づけは外発的動機づけよりもより目的行動の持続性がある。」とする学習心理学における動機づけの研究がスポーツ心理学とりわけメンタルトレーニングの分野で活用されている。

そして、なによりも「バドミントンを好きになってもらいたい。」という角やコーチの指導理念が質問③の回答が示すようにクラブ員に浸透しているといえる。

以上のようなことから、指導方針に合致した活動をしてきたといえる。

(2) 選手の感想（アンケートから）

クラブ員たちの回答の中でバドミントンの技術・体力面以外での感想から以下のような回答に注目した。

「友達ができた」「全力で応援できるようになった」「大学生や大人の人たちとの練習」「団体行動がとれるようになった」「競争し合うことの楽しさを学べたこと」「向上心が出てきたこと」「礼儀・あいさつが良くなった」「友達や先輩との接し方をおぼえた」「メンタル面が強くなった」

以上の回答からクラブ員の心理・行動面での変化を伺え知ることができる。これらはこの年代の児童・生徒が獲得しなければならない重要なライフスキルであるといえよう。本来家庭・学校でなされるべき「躰」の教育がこのクラブ活動の中でなされ、クラブ員たちが真摯な受け止め方をしていることが推察することができる。言い換えるならば、このクラブ活動は「徳育」の部分にも大きく係わっているといえる。

また、以下のような回答の中からは競技バドミントンへの強い達成意欲が感じ取れる。「バドミントンが好き」「オリンピックに出場したい」「全国大会に出たい」「勝ちたい」等これらのことから推測されることは、バドミントン競技に対しての活動意欲があり、動機づけができてきていることである。その背景にあるものとしては、活動内容、試合結果、人間関係等においての不満が極めて少ないことが考えられる。つまり、バーン・アウトをしないような環境がそこにあるということがいえる。

つぎに注目したのは質問⑤バドミントンをしていて嫌だったことは？（複数回答）で親に叱られる（6名）、負けが続いたとき（5名）が61%と過半数をしめたことである。その状況について複数のクラブ員に聞いてみると、「負けた直後に叱られる」というケースが大半を占めていた。このことから推察できることは、まず親の期待値と結果の相違からくるもの、あるいは試合内容に親が不満を持つてのこと等である。いずれにしても親が感情的になってのことと思われる。負けて悔しいのは当の本人ではあるはずなのだが、このような傾向が見られるのも日本が抱えている現代の風潮といえよう。それにもめげずバドミントンが好き

で、上位大会での活躍を夢見ているクラブ員が大半を占めるということは、バドミントン競技そのものの持つ魅力に相まってクラブ運営力の高さにあると考察する。

5. まとめ

指導にかけた時間と選手の結果にはある程度の相関は見られるが、他のクラブとの比較ができないためその詳細については言及できない。クラブ員である児童・生徒の大半はクラブの運営方針とコーチの指導内容に賛同し、好感を持ちながら積極的に取り組んでいる。

技術面での向上に伴って、社会性のある調和のとれた行動様式（ライフスキル）が身につく、相手の立場に立って考えられる精神面の成長がみられた。

今後の課題としては、年齢、性別、身長、体重に加え、体力測定 of 縦断的調査が必要であり、練習内容・方法の細部にわたる調査研究を通じて、試合結果との因果関係を分析するとともにジュニアレベルの最良の練習法を構築することにある。

参考文献

- (1) 文部科学省「スポーツ振興基本計画（総合的地域スポーツクラブの全国展開）」
平成2000年9月
- (2) 小島一夫「みてわかるバドミントン」西東社 1997年 P120～123
- (3) 日本小学生バドミントン連盟ホームページ <http://www.syoubad.jp/>
- (4) 日本中学校体育連盟ホームページ <http://www18.ocn.ne.jp/~njpa/>
- (5) 日本バドミントン協会ホームページ <http://www.badminton.or.jp/index.htm>
- (6) エヴァンズ：岡堂哲雄、中園正身訳 「エリクソンは語る—アイデンティティの心理学—」新曜社 1981年 P.34～48〈Evans.R.I (1967) Dialogue with Erik Erikson. Harper & Row, Publishers, Inc., New York〉
- (7) 北村優明、小島一夫「カナダ国・アルバータ州におけるバドミントン競技の強化策について」北翔大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践 第11号（2008）P.88～90